ISSN　0910−2396

野鳥だより

−北海道−

北海道野鳥だより第157号
編集・発行　北海道野鳥愛護会
発行年月日　平成21年9月21日

ヤ マ セ ミ

2009. 8. 5　後志管内共和町
撮影者　蓮　井　　肇（江別市大麻）

もくじ

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(4)
なぜ減ったのか？ 本当に中国で食べられているのか？
北海道環境科学研究センター自然環境部　玉田　克巳 …… 2
美唄にマミジロキビタキ　美唄市　藤巻　裕蔵 …… 4
永山新川のハクチョウ・カモ類について
日本野鳥の会旭川支部長　高野　正 …… 5
羽幌へやってきた鳥たち　―シロハラクイナ、キガシラセキレイなど―
石郷岡卓哉（北海道海鳥センター職員）…… 8
伊達市長流川でのメジロガモの観察報告
日本野鳥の会室蘭支部長　篠原　盛雄 …… 10
カワガラスの子育て拝見　札幌市中央区　白澤　昌彦 …… 11
探鳥会ほうこく …… 12
探鳥会あんない …… 16
鳥民だより …… 16

絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(4)
なぜ減ったのか？ 本当に中国で食べられているのか？

北海道環境科学研究センター自然環境部　玉　田　克　巳

シマアオジの減少を心配している人は大勢いると思う。そして、心配している多くの方たちは「なぜ減ったのか？」という疑問をもっているだろう。この連載の最初に、小清水原生花園の看板に「シマアオジ・・・激減の理由は不明で、個体数回復の有効な手だてについてもまだわかっていない」と書かれていたことは紹介した。正直に、減少の原因が解明できたとはとてもいえる状況ではない。しかし、それでは多くの人は納得できないだろう。今回は文献を中心に、減少の原因について、道内の牧草刈りのことと、中国で食べられているということについて紹介していきたい。

①　北海道の牧草刈り取りの問題か？

北海道では、6月に牧草の一番草を刈る。シマアオジが北海道に渡ってくるのは5月下旬で、6月は繁殖期の最盛期である。もしシマアオジが採草地で営巣していたとしたら、牧草の刈り取りは、シマアオジの繁殖に大きな影響を及ぼす可能性は容易に想像ができる。同じように草原に生息している鳥でも、ノビタキやオオジュリンは4月に渡ってくるので、遅く渡ってくるシマアオジの方が強い影響を受けそうである。このことを紹介しているのは竹中（2004）である。しかし私は、この文献を読んで3つの疑問を抱いている。まず第一は、シマアオジの減少時期の問題である。この文献にはシマアオジは1970年代に減少したとある。農耕地面積が拡大した時期、草刈りの季節が8月から6月に変わった時期も1970年代で、時期が一致しているとある。

しかし私の認識では、シマアオジが減少したのは1990年代である。本会の探鳥会の記録をみても、シマアオジが最後に記録されているのは、札幌市福移では1992年、同市東米里では1998年、苫小牧市植苗ではさらに遅く2002年である。道内では、草原を対象に継続的に実施している探鳥会はあまり多くないが、ほかの例をみても1990年代に見られなくなっている地域が多い。

もっとも、探鳥会は、その鳥がいたか、いなかったかだけの情報であるため、個体群の増減を測る資料としては、情報が充分ではない。探鳥会で観察されなくなる前に、その地域では個体数の減少がはじまっている可能性はある。とはいうものの各地で夏鳥の減少が話題になりはじめたのは1990年代前半である。シマアオジの減少を比較的早い段階で危惧していたのは、根室市春国岱ネイチャーセンターの川崎慎二さんで、彼が調査をはじめた1995年には、春国岱では確認されていない（川崎ほか　1997）。このことから1990年代前半には一部にシマアオジの減少を危惧する人がいたことは確かであるが、それより前にシマアオジの減少や夏鳥の減少が特に話題になっていた記憶は、私にはない。

第二の疑問は、仮に牧草の刈り取りが個体群に影響を与えていたとしても、シマアオジが減っているのは牧草地だけの話ではない。根室の春国岱、網走のワッカ原生花園、十勝の湧洞沼などなど、かつてシマアオジは、牧草地以外にもハマナスの生えるような海岸草原や、高層湿原などにも多数生息していた。牧草地の方が生息地として適しており、海岸の個体が牧草地に生息地を変える

ような習性があれば、話は別であるが、このような習性はおそらくなく、繁殖地への執着性は強いと思われる。だから、牧草の刈り取りでは、海岸草原などのシマアオジが減少したことを説明することはできない。

第三の疑問は、そもそもシマアオジが多く生息していたのは、採草を目的とした牧草地であったのかという点である。たしかに最近でも、採草がシマアオジに影響を与えそうな地域があったことは確かである。しかし、私が見ていた牧草地のシマアオジは、どちらかというと放牧地のような草丈が不均質な牧草地で、均質なイネ科草本が繁茂する採草地とはイメージが違う。牧草の刈り取りが鳥類相にどのような影響を与えているかについての研究はまだまだ少ないと思う。しかし、かつてのシマアオジが、採草を目的とした牧草地にどの程度生息しており、放牧を目的とした牧草地にはどの程度生息していたのか、今となっては調べる術がないのである。

② シマアオジは食べられているのか？

多様な食材を食べる習慣がある中国では、薬膳料理と称してさまざまなものが食卓にならぶ。この事実だけで、もしかして？と想像してしまうところがある。ここでは、中国でシマアオジが捕獲されていることが記述されている２つの文献を紹介する。中国で食べられていることが道内で疑われ始めたのは、おそらく高（1996）が発端になっていると思われる。高（1996）は「大自然」という文献に掲載されているものであるが、「シマアオジを空のニンジン(朝鮮人参)」と称してシマアオジを食べるお祭りがあることを紹介している。場所は中国南部の広東省三水市である。この文献によれば、シマアオジは10月にこの地域に渡ってくる。この時期はイネの穂が出て、開花し、実りはじめる時期であるが、シマアオジは、この未成熟のモミをたべる害鳥であるという。で、害鳥をとって食べるというものである。1992年10月に、シマアオジを食べるための第１回目のお祭りが開催されたとある。祭りには内外から10万人が集まるという。農家にとっては、食害の防除と、販売による副収入が入ることによって、２つの効果があることになる。

この文献にはさらに興味深いことが書かれている。それは、今から2100年以上前の遺跡（王の陵墓）から、副葬品としてシマアオジの骨が出土しているということである。中国では紀元前からシマアオジを食べる習慣があったということである。シマアオジを食べるお祭りは1992年から始まったとあり、このころにはかなりの個体数が犠牲になっていると思われる。食習慣自体はかなり古くからあるようであるが、一般の大衆がいつごろから、どの程度食べているのかということについては、この文献から読み解くことはできない。

次に紹介したいのはChan（2004）である。この文献でも三水市でシマアオジを食べるお祭りがあることが書かれているが、1992年にはじまったこのお祭りは、毎年行われていたが、1997年に終わったとある。１万人の観光客が訪れ（高（1996）では10万人で、数字が一致しない）、数十万羽の鳥が犠牲になったとある。中国では2000年８月にシマアオジは国の保護鳥に指定されているということであるが、この文献の興味深いところは、インターネットのニュースから、シマアオジの摘発事例などを広く検索し、紹介しているところである（表１）。ここに出てくる地域は、天津市を除くすべてが広東省で、香港に近い、中国南部の地域である。１件の事例で問題となっているシマアオジの数がほとんどの場合で数千羽から数万羽であるところが脅威である。あくまで摘発事例の紹介であるから、摘発されず、闇で売買されている個体数は、まだまだあるものと思われる。数字がどこまで信用できるのか？また、シマアオジ以外の鳥も混獲されていると思われるが、シマアオジの占める割合がどうなっているのかはわからない。もう一点興味深いことは、２人の研究者と情報交換をして、繁殖地であるロシアのアムール川中流域とダウリア地方でシマアオジの減少が見られていることが記述されている。

表１．Chan（2004）に紹介されているシマアオジの密売情報や摘発事例

① 三水市では今日も闇市が続いている（Nanfanwang website, 2000. 10. 27.）.
② 国全体で100万羽が売られ、推定１日約１万羽の鳥が三水市の一つの市場で売られている（Xinkuaibao, china.com, 2001. 10. 19.）.
③ 広東省では捕獲規制が不十分で、天津市で捕獲がはびこっている（People's Daily website, 2000. 11. 21）.
④ 三水市では2000年の１年間に200件の不法取引が横行していた（Dayangwang website, 2000. 11. 1）.
⑤ 天津市で捕獲された鳥、約100,000羽が広州の韶関の列車の中から見つかる（news.www.eastday.com, 2001. 8. 17）.
⑥ 5,300羽の死体が広東省の南海市で見つかった（www.southcn.com news, 2001. 10. 19）.
⑦ 3,000羽以上の死体が広東省の恩平の車の中から発見（www.southcn.com news, 2001. 11. 1）.
⑧ 700羽が押収されて瀾石、湛江で放鳥された（www.southcn.com news, 2001. 11. 2）.
⑨ 20,000羽以上の鳥が広州で押収（www.southcn.com news, 2002. 8. 22）.
⑩ 約3,000羽の鳥が広州に向かう天津空港で見つかる（www.caajournal.com, 2002. 12. 4）.

③ 原因はなにか？

ここまで、北海道の牧草刈りについては３点の疑問を投げかけて批判的に、中国で食べられているということについては、もっぱら文献紹介で、どちらかというと肯定的に紹介してきた。しかし、だから原因は中国にあると結論するのはまだ早いと思っている。北海道の牧草刈りがシマアオジ減少の主たる原因であるという点では疑問が残るが、採草している場所でシマアオジが生息していたところもあったであろう（竹中さんたちが観察していた場所では、採草地に営巣しており、実際に採草を延期してもらっていたようである）。牧草刈りが、減少の主たる原因ではなかったとしても、いくつかの個体に影響を与えていたものと思われる。また、中国の実情については、文献の記述が、どこまでが真実なのかはわからない。ある程度（かなり？）食べられていることは事実であると思うが、シマアオジの繁殖地は北海道だけはなく、ユーラシア大陸の北部に広く分布している。中国で、闇で売買されている数字も明らかにできないが、世界全体で繁殖しているシマアオジの個体数も、もちろんわからないし、密猟がどの程度個体群に影響を与えているかはわからない。さらに、中国で捕獲されている個体群と北海道の個体群の関係も明らかになっているわけではない。

2002年ごろから道内各地でシマアオジを観察している。そして2008年に再調査したいくつかの地域では、シマアオジが消滅していたところがある。消滅してしまった野付半島や標津湿原などは保護区にもなっており、私の目で見る限り、環境の改変はないように見える。このような現状を見ていると原因が、繁殖地ではないのではないかと疑いたくなる。しかし中には、ウトナイ湖北岸のように、ヤナギ類の樹高が高くなり、シマアオジには棲みにくい環境になっているように感じるところもある。もう少しシマアオジの身になって自然を見つめてみる必要がありそうである。また中国で食べられているということについては、文献は探し出したものの、実態がどのようになっているのかを確かめたわけではない。北海道側に原因がないという結論も、中国で食べられていることが原因ではないかという結論も、もう少し先送りしておきたい。

文　献

Chan S （2004） Yellow-breasted Bunting ***Emberiza aureola***. BirdingASIA 1：16.17.

高育仁（1996）天上人参禾花雀．大自然１：34-35.

川崎慎二・加藤和明・樋口広芳・高田令子(1997)北海道東部・春国岱の繁殖期の鳥類相の変化．Strix 15:25-38.

竹中万紀子（2004）シマアオジのために私たちができること．faura 4:22-24.

美唄にマミジロキビタキ

美唄市　藤巻裕蔵

わが家の裏は美唄市の公園になっている（この公園の鳥類の概要については本誌137号参照）。2009年６月１日の早朝こと、庭の手入れをしていると、公園のハルニレの樹冠部から聞きなれない囀りが聞こえてきた。「ピロリーチー」という２音節と「ピロリー」という１音節の声が交互に続く。声の主を確かめようと早速家に双眼鏡をとりに行き、柵を乗り越えて公園へ。

声の主はさっき居たハルニレから飛び去り、公園中央にある池の東側に立っているヤナギ大木の樹冠部で囀っている。なきながら移動しているが、繁った葉でなかなか姿が見えない。そのうち樹冠から飛びだし池の対岸にあるヤナギの大木に移動した。小型の鳥である。

私もその木の下まで移動し、樹冠部の小鳥をさがす。やっと双眼鏡で姿をとらえることができた。見上げている状態では、喉から胸、腹にかけて全体にやや淡い黄色で、翼が黒いことはわかった。一瞬キビタキをおもったが、喉のオレンジ色がないし、囀りもキビタキとまったく違う。「もしかしてマミジロキビタキ」とおもったが、真下から見たので、横顔を見ることができず、確認はできなかった。この個体は30分間ほど囀っていたが、やがていなくなった。その後公園には一度も姿を現していない。

もう一つの確認方法は囀りである。これまでロシア沿海地方でコウノトリ、ナベヅル、エゾライチョウ、シマフクロウの調査のときにマミジロキビタキの囀りを何回も聞いているはずなのだが、思い出せない。あとは６月１日に聞いた声を忘れないうちに録音された囀りにあたるしかない。幸いなことに、花田行博さんがロシアでマミジロキビタキの囀りを録音していた。早速それを送っていただき、聞いてみた。まさに６月１日の早朝に聞いた囀りそのものであった。

日本鳥類目録改訂６版によると、マミジロキビタキは日本では迷鳥で、これまでに本州と九州のほか、対馬、男女諸島、トカラ列島、八重山諸島で記録されているが、北海道では未記録である。

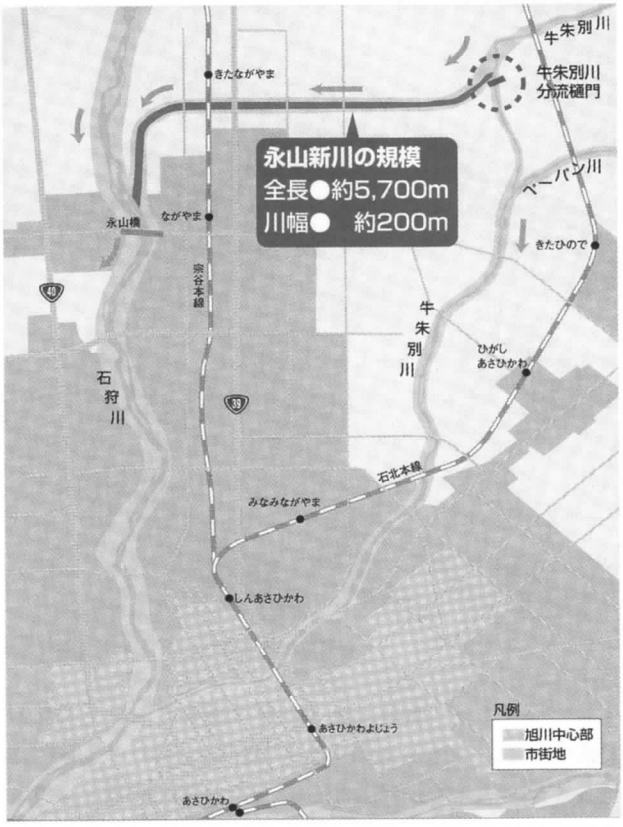
永山新川のハクチョウ・カモ類について

日本野鳥の会旭川支部長　高　野　　正

旭川市の中心部から国道39号線を層雲峡方面に向って10km程進み、旭川大学を過ぎると間もなく200m程の牛朱別大橋を渡る。高低差のないほとんど平坦な国道橋なので、気付かないうちに渡ってしまう。この橋の下を流れているのが永山新川である。牛朱別川の洪水を防ぐため、牛朱別川を切り替え石狩川へ流す牛朱別川分水路として、昭和59年の用地補償に始まり、昭和62年に工事開始、20年近い歳月をかけて平成16年に完成した全長約5.7km・川幅約200mの川である。

工事が始まって、その進行の過程で部分的に池状の溜りが出来たところに、ハクチョウ・カモ類が飛来するようになり、それに対し近隣の住民の善意の給餌が行われたことによって年々その数が増えていき、始めの頃は20～30羽のハクチョウの飛来が平成10年には300羽以上も飛来するようになった。観察のしやすい場所であることもあってハクチョウ・カモの来る川として、一般市民に認知されるようになり、今ではシーズンになると大勢の市民が集まり心を癒す憩いの場所となっている。

旭川河川事務所が早くからハクチョウ・カモ類の飛来寄留数を毎朝年間を通じ調査している資料があるが、その資料から年別・季節別のデータをまとめたものが別表（表1、2）の通りである。この調査によると、平成14年からは飛来数が1,000羽近くになり、更に平成17，18年には3,000羽を超え、平成19年以降は飛躍的に増大して毎年6,000羽を超えるまでになった。

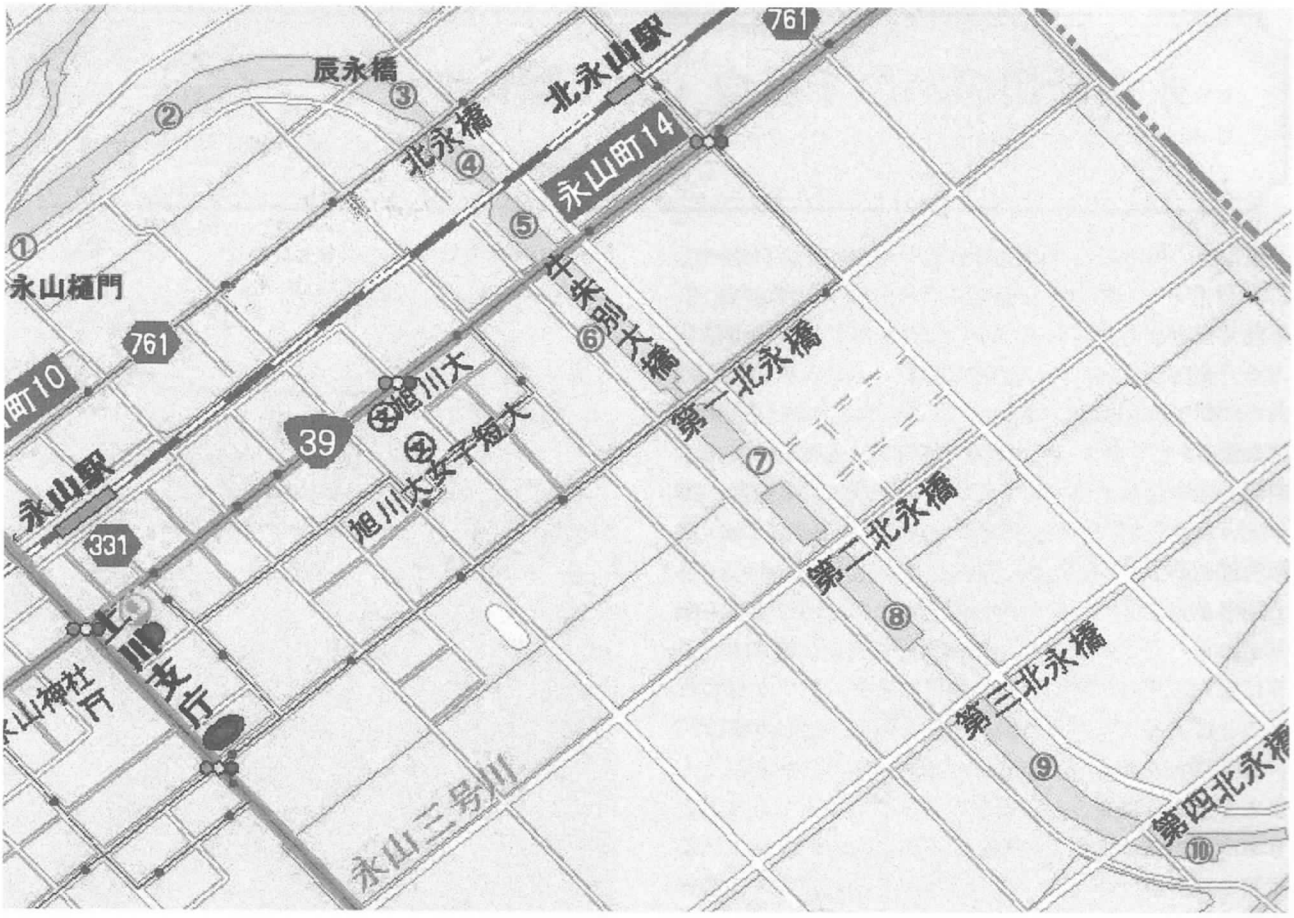


永山新川位置図

表1　年別・季節別ハクチョウ飛来数

調査年（平成）	春季						秋季					
	初飛来		最大飛来		最終飛去		初飛来		最大飛来		最終飛去	
	月/日	羽数	月/日	羽数	月/日	羽数	月/日	羽数	月/日	羽数	月/日	羽数
10	不明	3	4/16	382	5/08	1	10/22	7	10/22	7	10/27	7
11	3/15	3	4/21	314	5/03	3	10/20	1	10/23	2	10/28	2
12	3/20	7	4/26	286	5/02	11	10/21	1	10/24	2	10/29	2
13	3/20	5	4/16	382	4/30	16	10/21	9	10/21	9	10/26	8
14	3/15	15	4/12	905	4/26	5	10/22	13	11/21	30	12/03	11
15	3/07	2	4/15	1,467	5/01	37	10/07	1	11/09	85	12/06	40
16	2/14	2	4/12	1,611	4/30	13	10/19	1	11/25	40	12/30	1
17	3/07	4	4/18	3,590	6/23	1	10/12	1	11/13	75	12/31	3
18	2/20	2	4/18	3,518	6/23	2	10/13	1	11/06	113	越年滞留	
19	2/18	11	4/12	6,703	5/05	1	10/15	5	11/05	114	01/26	1
20	2/21	2	4/02	8,264	5/09	1	10/13	12	11/16	158	越年滞留	
21	2/14	10	4/08	6,920	4/30	13						

旭川河川事務所（河川環境管理財団旭川巡視センター）調査による。



永山新川周辺地図　⑥の右岸に駐車場があり観察の適地となっている。

オオハクチョウとコハクチョウの飛来区域を上記図面で説明する。オオハクチョウは図面③～⑧の中流域に寄留し、コハクチョウは①②、⑧～⑩の下流域・上流域にと別れて飛来する。数的に最も多い区域は①なのでコハクチョウの方が多く飛来していることになる。アメリカコハクチョウも僅かではあるが毎年のように飛来するし、コブハクチョウも平成20，21年と１羽ずつ飛来が確認されている。

春にはこのように多数の飛来があるのに、秋には渡りの経路が異なることによるのか、表１のように最大でも200羽に満たない飛来数であることに奇異の感がするがこれは今後の解明を待ちたい。

次にカモ類の飛来数を見ると、表２の通りカモ類もやはり平成18，19年は最大が７万羽を超え、更に平成20，21年は10万羽を超えるまでに増大している。カモ類の寄留している区域は図面⑥が最も多く、次いで⑦⑤で、その他の区域にはそれほど多くない。当会で本年４月12日カモの種の調査を実施したが、オナガガモが95％と圧倒的に多く、次いでヒドリガモが２％、それにコガモ・マガモ・キンクロハジロなどが続き、ハシビロガモ・カワアイサ、更に僅かだがトモエガモ・ヨシガモ・ホシハジロ・シマアジ・ミコアイサ・アメリカヒドリなどもその日確認された。

春にはこのように大量に飛来するカモ類も秋にはやはり極端に少なく、最大で5,000羽くらいに止まるのは経路が異なることによるものと思う。それと飛来の種も春の

表2　年別・季節別カモ類飛来数

春季

調査年（平成）	飛来が1万羽を超えた日		最大飛来日		滞留が1万羽以下になった日	
	月/日	羽　数	月/日	羽　数	月/日	羽　数
18	4/03	21,110	4/15	74,740	4/28	7,478
19	3/29	10,494	4/04	78,754	4/26	4,137
20	3/19	12,323	4/07	137,167	4/20	7,928
21	3/21	10,877	4/11	124,737	4/22	8,717

秋季

調査年（平成）	飛来が3千羽を超えた日		最大飛来日	
	月/日	羽　数	月/日	羽　数
18	10/21	3,012	11/15	5,835
19	10/19	3,421	11/04	5,117
20	10/17	3,423	10/19	4,510

旭川河川事務所（河川環境管理財団旭川巡視センター）調査による。

新川周辺図⑥の観察地の光景

河畔に立てられた餌やり自粛の看板

オナガガモのように突出したものはなく、マガモ・コガモ・オナガガモが主でその他は少ない。

以上述べたように平成19年以降ハクチョウ・カモ類共に飛来数が爆発的に増大したのであるが、平成20年に十和田湖畔やサロマ湖畔でオオハクチョウの死骸から鳥インフルエンザウイルスが発見される事例があったこともあり、永山新川においても過剰な給餌を行い、密集をさせることで感染症の集団発生を起こす危険性も高いことから、関係機関や当会などが相諮り、「人と野生生物の関わりを考える会」を設立し、餌付けを自粛するとともに、今後どのように人と野生生物の関わりを創っていくべきか、行動を始めたところである。

こうした動きによって、過大な密集が解消され、人と水鳥の間に適正な「距離感」が保たれ、永山新川が市民が野鳥と親しみ、野鳥観察やふれあいを楽しむ場として、又市民の憩い・自然学習の場として今後も愛される場所であってほしいと願うものである。

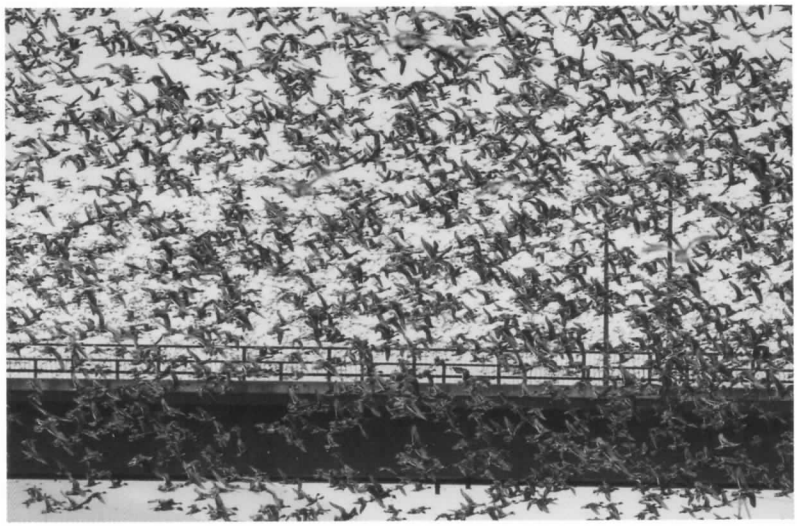
の群れが飛来している。オオヨシキリ・コヨシキリが5月中旬、カッコウが5／21初飛来それから夏まで滞留している。5月下旬シマアオジの通過するのが何日か見られた。ショウドウツバメ・イワツバメも時々群れで訪れる。

植林した河畔林が成長してきたので、こうした鳥たちの生息する環境が整ってきて、将来探鳥の好適地になることと思われるのである。

おわりに

ハクチョウ・カモ以外の鳥につき、河川事務所の調査資料から若干補足説明したい。

オジロワシが1月になると、1，2羽ではあるが4月中旬まで毎日のように訪れてくる。今年の最終は4／24であった。ヒバリは3／30、カワラヒワが4／1に初認され、ムクドリ・ハクセキレイなどと毎日河原を賑わす。4月の初旬ダイサギ・ユリカモメが各1羽確認され、ダイサギは5月中旬まで滞留した。ベニヒワが4月上、下旬、オオマシコが4月中旬群れをなして飛来した。4月中旬にはアオジ・キジバト・コチドリなどが初認される。オオジュリン・ノビタキ・イスカ・ギンザンマシコなどもこの頃通過した。4／23にはアジサシの60羽



オジロワシの飛来を察知して一斉に飛び立つカモの大群

羽幌へやってきた鳥たち
—シロハラクイナ、キガシラセキレイなど—

石郷岡　卓　哉（北海道海鳥センター職員）

羽幌は、留萌市から北に約50㎞、道北の日本海側に位置する町です。沖合には、天売島と焼尻島という２つの島があり、天売島は世界有数の海鳥繁殖地として、焼尻島は渡り鳥の中継地として、毎年多くのバードウォッチャーが訪れます。

道北の日本海側でのバードウォッチングといえば、島かサロベツ原野（幌延町・豊富町）などが有名で、島ではない羽幌町周辺で鳥を見る人はあまりいません。しかし、日本海沿いを通過していく渡り鳥は羽幌も通過していくため、渡りの季節などはさまざまな鳥を見ることができます。

特に今年（2009年）は、シロハラクイナやキガシラセキレイなど南方系の鳥も見られ、大変面白いシーズンでした。その一部を、ここで紹介したいと思います。

■タンチョウ

３月９日に海岸沿いの牧草地で、住民によって発見されました。2004年からはサロベツ原野で繁殖個体が毎年確認されていますが、羽幌では初記録になります。全て若い個体で２羽は３年目くらい、１羽は昨年生まれと思われます。その年齢から、サロベツの個体とは別個体です。

人を警戒して、居場所を頻繁に変えていましたが、やがて羽幌川の中州へ落ち着き、雪解けとともに周辺の農地で採餌している姿が観察されました。４月10日まで約１ヶ月間観察されましたが、その後どこかへ飛び去りました。

また、後日談があり、このタンチョウのものと思われる羽を採取し、タンチョウの研究家である正富宏之氏に分析を依頼したのですが、遺伝子解析の結果、遺伝子の一部にタンチョウと良く似た部分があるものの、種としてはクロヅルの配列だったとのことです。クロヅルは羽幌では確認されていません。気がつかなかっただけでクロヅルが羽幌に来ていた？あるいは雑種？？など興味は尽きませんが、今のところ理由はわかっていません。今後の研究に期待しつつ、クロヅルの飛来が今後あるのか、観察を続けたいと思っています。

タンチョウ

■コクマルガラス

３月15日に町内農地で観察されてから、しばらくの間、30羽ほどのミヤマガラスの群れとともに行動していました。観察された数はいずれも２羽から３羽です。徐々に北上を始め、25日の朝は町北部の海岸沿いの草地で観察されましたが、昼頃には遠別町で観察され、27日には豊富町で観察されました。いずれも同じ群れが移動したと思われます。道北沿岸の観察ネットワークが活かされ、群れの移動を追跡することができました。

■コアカゲラ

４月14日に、町内の防風林で発見されました。羽幌では初記録です。この後、しばらく見られませんでしたが、５月５日に目撃情報が寄せられました。名寄など内陸の山間部ではよく見かけるようですが、道北の海岸沿いではきわめて希な鳥です。場所によっては徐々に分布を広げてきているとの見解もあり、今後の動向が注目されます。

コアカゲラ

■シロハラクイナ

町内の民家の庭先に５月初め頃からシロハラクイナが出ていると、この家の住人から聞き、５月12日に確認しに行きました。家におじゃまし待つこと１時間、きれいな色の花で彩られた花壇の向こうに、ひょこひょこと頭を動かすシロハラクイナが現れました。

琉球列島に留鳥として分布しているシロハラクイナは、近年、北へと分布を広げ、全国各地で目撃情報があるほか、

シロハラクイナ1

シロハラクイナ2

繁殖記録もあります。道内でも、観察記録は多数あり、昨年は天売島でも記録されていますがやはり珍客であることに変わりありません。しかも、庭の花壇の中を歩いている姿には、驚きを隠せませんでした。

見ると、花壇を横切り庭の外へ出て行きます。そこには周りの樹木の落ち葉を溜めてできた堆肥場がありました。シロハラクイナはここでミミズなどを捕らえていたと思われます。これで、庭先を住みかとしていた理由がわかりました。

しばらくの間、この庭先で見られていましたが、やがて姿を消しました。

■キガシラセキレイ

5月15日に日本野鳥の会道北支部会員である岩澤光子氏によって、「自然空間はぼろ」(通称：羽幌ビオトープ) 内で発見されました。「自然空間はぼろ」とは町民有志で道北本来の自然を復元しようと、市街地近くの河川の切り替え跡地7ヘクタールに、小川や池の造成、植樹などをしている場所です。造成を始めてから5年が経過し、池の周辺にはさまざまな鳥たちが集まるようになりました。

今回発見されたキガシラセキレイは、日本の図鑑に掲載されているものとは明らかに背の色が違います。図鑑掲載のものは背が灰色ですが、今回発見された個体は、黒色をしています。利尻島自然情報センターの小杉和樹氏によると、チベット高原や中国中西部に分布している亜種 ***Motacilla citreola calcarata*** ではないかとのことでした（日本で確認されているのは ***M. c. citreola***)。また、キガシラセキレイの道内での観察例は1987年の浜中町と1998年の利尻島に続き3例目、亜種 ***M. c. calcarata*** の記録は、おそらく初めてではないかということでした。

私は、岩澤氏から情報をいただき翌16日に確認しました。池の周りから離れず、小さな虫を探して食べているようでしたが、時折ハクセキレイが来ると追い払われて池の反対側へと飛び去り、しばらくすると戻ってきて採餌を続けていました。個人的には背が灰色のものより黒と黄色のコントラストがはっきりしていて、それがとてもきれいに見えたのですが、いかがでしょうか。

もっと長く留まってほしかったのですが16日を最後にどこかへと飛び去りました。

今回紹介した鳥以外にも、さまざまな鳥がやって来ましたが、それらは誌面の都合上割愛させていただきます。羽幌周辺で見られた鳥を始め、四季折々の自然情報、天売島の海鳥たちの様子などを海鳥センターのホームページとブログ「海鳥日記」で公開しています。ぜひご覧いただければと思います。

海鳥センターHP
http://www3.town.haboro.hokkaido.jp/seabird
ブログ「海鳥日記」
http://seabirds.exblog.jp/

キガシラセキレイ

伊達市長流川でのメジロガモの観察報告

日本野鳥の会室蘭支部長　篠　原　盛　雄

2009年5月25日（月）16：42長流川河口でキンクロハジロの数羽の群れの中に、同じくらいの大きさで、今まで見たこともないカモが一羽混じっていました。虹彩が白いので、アカハジロの類かと図鑑で確認しましたら、なんとメジロガモでした。まさかと思い、フィールドスコープで特徴を詳細にわたって3冊の図鑑で確認しました。虹彩が白であること、アカハジロは頭が緑色であるのに対し、メジロガモは明るい褐色であること、泳いでいる時に脇に白色部が無いことなどで間違いなく「メジロガモ」雄と確認しました。これは記録をとらなければと思い、写真撮影を30分ほどしながら、野鳥の会の役員にも見てもらわなければと気づき携帯で室蘭・登別の役員へ連絡をしました。それを聞いた役員が、新聞社、ＮＨＫに連絡をし、その日長流川河口はカモの姿が確認できなくなる19：40頃まで、駆けつけた10名ほどの関係者で賑わいました。ＮＨＫは翌日26日の18：10からの全道放送、北海道新聞は5月27日朝刊の全道版での報道となりました。これまでメジロガモについては、文書で記録として報告されたことはなく、この報告が実質的に北海道でのメジロガモについての初記録となると思われます。

この時期、シギ・チドリの渡りの最終週ですので例年のように、私は毎日観察へ出かけていました。5月23日16：15アルトリ岬で110を越えるチュウシャクシギの群れが上空を東へ飛ぶのを確認し、5月24日、25日と連日西風が強く吹いている中、今シーズンシギ・チドリの最大の観察日となっていました。この強い西風の中、「メジロガモ」も北上してきた数羽のキンクロハジロと一緒に長流川へやってきたようです。終認を確定するため、毎日、朝と夕方確認に長流川へ観察に出かけました。すぐ飛び立つだろうと思っていましたら、5月25日から6月8日まで2週間にわたって長流川河口で観察することができました。

このメジロガモは長流川河口の下水処理場の排水口で、最終処理され流れてくる排水の中から何か小さいものを盛んについばんでいました。下水処理の管理者に最終処理の

はばたくメジロガモ

排水の質について聞いてみましたら、完全に無害な形で、排水処理しており、カモが食べるような有機物、固形物は含まれていないとのことでした。しかし排水を良く観察してみると、何か白い小さなものが混ざっていました。排水の温度が少し高いので排水路に何か藻のようなものが出来、それがはがれて流れてくるのではないかと思われます。長流川で越冬する、コガモ、ヒドリガモなどもよく排水口で同じように何かをついばんでいますので、カモが好きなものができているのかもしれません。この「メジロガモ」は一羽のキンクロハジロと仲良くに2週間の間、下水の排水口で毎日、流れてくる何かをついばんでいました。観察をしていると5羽のキンクロハジロと行動をともにしているようでした。6月9日夕方観察にいって見ると、5羽のキンクロハジロの姿も「メジロガモ」の姿もありませんでした。その後も観察に出かけましたが6月8日以降確認できませんでした。2週間の間、カメラマンがどやどややってくることも無く、「メジロガモ」は長流川河口で落ち着いた生活をしていましたのでよかったと思います。長流川は河口で約50m程度の小さな川です。この小さな川で、240種を越える野鳥が飛来し、迷鳥とよばれる野鳥が次々と観察されるのは、鳥の渡りの中継地として地理的に重要な位置にあることを示しているのかも知れません。

メジロガモ（左はキンクロハジロ）

カワガラスの子育て拝見

札幌市中央区　白　澤　昌　彦

平成21年６月６日（土）に南区の白川地区、国立療養所札幌南病院のそばにある藻岩ダムに流れこむ観音沢川沿いの林道の鳥見を初めて行った。観音沢川は小さな川で、藻岩ダムへの流入口には岩盤の上を水が流れる所謂「滑滝（なめたき）」が見られる。暑い日に川縁にたたずむと気持ちが良さそうである。ここの林道は昨年夏に初めて入り、林道の峠近くにこれまで見たこともない花が咲いていたのを見て、興味をもった林道である。

林道を歩き始めるが、鳥の声はさっぱり聞こえず、抱卵、育雛期に入っているようで、余り期待はできないことを思い始めた。最初に見られた鳥は、川を隔てた向いの枯れたような木に留まりさえずっているオオルリだった。頭頂の薄いブルーが正面からよく見える。次に現れたのは、キセキレイで育雛中なのか、私の周りを警戒の鳴きとともに飛び回っていたので、急ぎ足でその場を通過した。

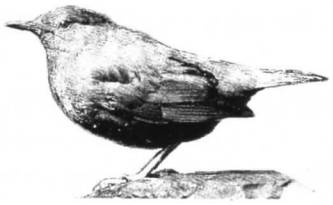
林道のゲートをほぼ同時に出発した植物観察の人と歩みが一緒となり、エゾノシロバナシモツケやヤマハナソウなどの花を教えてもらいながら進むと、川沿いにビィッ、ビィッとカワガラスが鳴きながらすぐ近くにやってきた。背が茶色味かがったカワガラスのくちばしには餌がくわえられていた。私を警戒してか、鳴きながら尾羽を仕切りと振り、周りからはキシキシキシと激しく鳴く声が聞こえ、鳴く方向を見ると幼鳥というよりも巣立ち間もないと思われる雛が羽を小刻みに振って、餌ねだりをしていた。やがて親鳥はその雛に餌を与え、直後に水に入って餌を探し始めた。雛は灰色の羽に薄茶色の斑点がある感じで、大きさは親鳥と同じくらいで、止まっていた石の色と同化していて、親が来なければ分からないで通過していたところである。

カワガラスの雛を見たのは初めての経験なので、しゃがみ込んで親鳥に気づかれないよう観察を楽しむこととした。見ていた場所は川のすぐそば、土盛りされた部分で、川から４ｍほど高くなっていたので、中々に良い観察ポイントであった。

雛は親を待っている間、体全体をイソシギのように仕切りと上下に動かし、舜幕を目の上から下にしょっちゅう降ろし、そのたびに目のところが白く見える。羽毛を膨らませながら、給餌を待っている。その雛が１ｍほど上流に移動したところ、別の雛が石を伝い水に入りながら、元いた雛の場所に現れた。２羽目である。親鳥が水棲昆虫らしき餌を２匹くちばしにくわえ戻って来て、元気に餌を求める方の雛に給餌をしたあと、その場所から前回とおなじように、その場ですぐに水に入り、水中に頭を入れ、流れに身をまかせるような形で餌を捜しながら下流に下り、時には餌をみつけたのか流れに抵抗して潜水・採餌をすることもあった。私は親の身の安全を考えるならば、給餌後、その場から飛び去って、餌のたくさん採れるところに行くものと思っていたが、これはきっと雛に餌の採り方を教えているのではないかと思った。この同じ行動を数回見ている。しばらく親の来る間が空いている時の雛たちは、水の中を歩いたり、水中にくちばしを入れ餌を採るようなしぐさをしたり、２羽一緒になったときは、相手の雛の水中の青みがかった灰色の足指が餌に見えるのか、餌を採るようなしぐさで足指を突いたりもしていた。 羽毛を膨らませているときは体を上下させる仕草はほんのわずかであるが、親が来ると動きが躍動的となる。グイッグイッと動かしている感じである。

親鳥が来るまでしばらく間があったが、左手側の下流で雛が餌を求めるけたたましい鳴き声が聞こえ、合計３羽いることが分かった。このあと、この雛は上流の２羽いるところに移動し、３羽まとめて観察できるようになった。何分かして親が餌をくわえて戻ってきたが、中々給餌をせず、そのうち林道などに河川水を通す大きな鉄製の丸い管の方に行き、しばらくすると親鳥が現れたが、餌をくわえていなかったので、もう１羽いることが伺われた。図鑑で抱卵数を調べてみたところ４～６とあり、４羽いてもおかしくないことである。

親鳥は私のいるところから10ｍくらい先で入水し、水に顔を入れ、あるいは潜りながら、餌を捜しており、水棲昆虫だけでなく、目の前で５㎝ほどのカジカを捉え、魚の頭部をくわえ尾の方を石にたたきつけたものを給餌していた。川沿いのフキなどにフキバッタが固まりになってとまっており、川に落ちたバッタも餌にするのかどうか興味があるところです。雛も動き出し石伝いに時には水に入り移動し始め、居場所がバラバラになったので、この場を私も去りました。全部の雛が元気に育って立派な成鳥になって欲しいと願いました。



千歳川

2009. 5. 17

札幌市北区　辻　　雅司

2年前から夫婦で探鳥会に参加させていただいております。探鳥会後の妻との「鳥合わせ」に加え、「人合わせ」の成果でしょうか、この頃やっとお顔とお名前、また皆さまの得意技とが一致してきました。千歳川の探鳥会は、ゴールデンウイーク前後に予定されていた仕事がやっと終わり、心軽やかにはずんだ気持で、バードウイークにふさわしい春の鳥たちとの一年ぶりの再会を楽しみに参加しました。

探鳥会開始を皆さんと集合場所の川辺で待っていますと、対岸にカワセミがさっそく現れ、しばらくの間我々の目を楽しませてくれました。と、川向こうの背の高い木立の上を、キジバト程度の大きさでやや白色の2羽の鳥がすごい勢いで飛んで行きます。妻と顔を見合わせ、「いまのは何？」。近くにおられた方から、鳴き声からしてヤマセミと教えていただきました。ヤマセミは川面を飛ぶものと思っていましたので、あのような上空を飛ぶこともあると知って驚きです。その直後に、その2羽かと思われるヤマセミが先ほどよりも低い高さで飛来し、また私たちの前をUターンして行きました。探鳥会が始まってからも、枝に止まったヤマセミをじっくり見ることはできませんでしたが、このようなフライトを数度にわたり楽しむことができました。

発電所ダムの川向こうの高い松の梢の先にオオルリが留まり、青空を背景に陽光に照らされ、さらに鮮やかに映えた頭頂のコバルト色が印象的でした。あのような小さな体であのように繊細な羽根を懸命に羽ばたかせ、野山を渡り、海原を渡り、今年も私たちの前に再びその愛らしい姿を現してくれる小鳥たち。愛おしいですね。この自然が彼らにとっていつまでも心地よい環境であって欲しいものです。

鳥合わせで確認した鳥の数は42種と多数でしたが、私自身が確認できたのはその半分程度でした。でも、クロツグミ、オオルリ、センダイムシクイ、ウグイスのさえずり、木々の若葉のもえぎ色、あちらこちらに咲くミヤマエンレイソウ、オオバナノエンレイソウ、ニリンソウの清楚な白色の野辺の花々、風雪に耐え異形に変形した木々、水辺の倒木を覆う苔の緑色の微妙なグラデーション、清らかに透き通った水面。この季節この場所でしか味わえない自然との一体感にたっぷりと浸ることができ、大満足のひとときでした。

【記録された鳥】トビ、ハイタカ、オシドリ、マガモ、コガモ、カルガモ、キンクロハジロ、オオセグロカモメ、キジバト、ツツドリ、ヤマセミ、カワセミ、アカゲラ、コゲラ、キセキレイ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワガラス、クロツグミ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、コサメビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス　以上42種

【参加者】赤沼礼子、井上公雄、五十嵐加代子、今村三枝子、岩崎孝博、内山純一・雅子、川東保憲・知子、工藤綾子、栗林宏三、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、駒川智子、小松正幸、小山久一、斉藤由美子、佐々木英之・玲子・なな、佐藤ひろみ、品川睦生、清水朋子、白澤昌彦・瑠美子、高橋良直、辻　雅司・方子、戸津高保・以知子、内木克己・靖子、長尾保秀・由美子、成澤里美、温井日出夫、蓮井　肇・茜、畑　正輔、原　美保、広木朋子、松原寛直・敏子、村木敬太郎、山本昌子、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、鷲田善幸　以上50名

【担当幹事】白澤昌彦、栗林宏三

鵡川河口

2009. 5. 24

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、トビ、ハヤブサ、カルガモ、ダイゼン、コチドリ、キョウジョシギ、トウネン、ハマシギ、キアシシギ、オオソリハシシギ、チュウシャクシギ、ホウロクシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、ヒバリ、ショウドウツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、コヨシキリ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス　以上29種

【参加者】岩崎孝博、内山純一・雅子、門村徳男、川東保憲・知子、岸谷美恵子、坂井伍一・俊子、品川睦生、清水朋子、田中哲郎・洋子、高橋良直、辻　雅司・方子、長尾保秀・　由美子、中正憲佶・弘子、成澤里美、蓮井　肇、浜野チエ子、樋口孝城、平野規子、　松原寛直・敏子、吉中宏太郎・久子　以上29名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

植苗ウトナイ

2009. 5. 31

札幌市清田区　広木　朋子

植苗は雨が多いから！と前夜から心配しながら寝床に着きました。朝眼が覚めたら案の定雨模様でどうしようか悩みましたが、霧雨でもやった草原のエゾノコリンゴに留っているシマアオジの姿やベニマシコの姿を思い浮かべましたらいざ行かん！目的地に向って車を走らせ植苗駅前に到着しましたら会員の方々の車が余りに少ないので少々ビックリしましたが、時間と共に顔見知りの方々が車から降り

てこられて安心。

今日こそは先発隊でと張り切って出発。少し下り坂を歩いた処で茶色の少し大きな鳥がワサワサ！と道路スレスレに横切って林の中に入って行きましたがあれが何の鳥であったのか確認も出来ずに探鳥を終って鳥合せの時にヤマシギがいましたとの報告。きっとあの鳥がヤマシギだったのではないかと残念至極でした。

でも傘を差しながら遠くの木に留って囀ってノドの赤色を見せてくれたノゴマ、そして大きな木の上でオオジシギが誰かを探している様子、嘴が長いね！と幹事さんのプロミナで見せて戴きそれだけでも感動なのに暫くして二羽のオオジシギが空中で追い掛けっこ、フライトショウを随分長く見せて戴き感激のしっ放し。シマアオジには会えませんでしたが、コヨシキリ、ノビタキ、オオジュリンと草原の鳥達のお出迎えを受けて雨の植苗も又とても楽しい一時で幹事さんには感謝の一日でした。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、チュウヒ、オオタカ、ヤマシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、ツツドリ、アリスイ、アカゲラ、ヒバリ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、マキノセンニュウ、コヨシキリ、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、シジュウカラ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、イカル、シメ、スズメ、コムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス　以上35種

【参加者】赤沼礼子、阿部真美、今村三枝子、後藤義民、小山久一、白澤昌彦・瑠美子、田中　洋・雅子、辻　雅司・方子、戸津高保・以知子、中正憲佶、広木朋子、真壁スズ子、鷲田善幸　以上17名

【担当幹事】白澤昌彦、鷲田善幸

平和の滝

2009. 6. 6

札幌市西区　木村　　正

初めて「夜の探鳥会」に参加しました。あいにくの雨模様となり探鳥会が行われるのか、鳴き声が聞けるのか心配しましたが幹事さんの分りやすい説明を聞きながら歩き始めると直にアカハラやキビタキ、ウグイスなど薄暗くなる中で多くの鳴き声がする事に驚きました。

送電線下では初めてジュウイチやコノハズクの鳴き声をはっきりと何度も聞く事ができました。

やはり１人２人で夜の山に入るのは気味が悪いですし、鳴き声だけでは初心者ですので鳥の名前も分りません。このような「夜の探鳥会」という企画とても良いと思います。今回ベテランの方々に色々と教えて頂きながら夜の森を歩き、鳥の声を聞く、しかも雨の中を。ふだん中々できない事を体験し、参加できたことがとても良かったです。

これからも「夜の探鳥会」を続けて下さい。どうもありがとうございました。

【記録された鳥】ジュウイチ、ツツドリ、コノハズク、ヨタカ、ミソサザイ、マミジロ、アカハラ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、ヒガラ、メジロ、カワラヒワ　以上14種

【参加者】岩井　茂、岩﨑孝博、木村　正・裕美、清水朋子、戸津高保、中正憲佶・弘子　以上８名

【担当幹事】岩﨑孝博、戸津高保

東　米　里

2009. 6. 14

札幌市東区　百々瀬　満

野草の観察が好きで豊平川、モエレ沼散歩コースで林から聞こえる小鳥に興味も持っていた。いくつかの愛鳥会があるのも知っていたが入会は決め兼ねていた。

伏古に住んでいて伏古公園はそんな想いに最高な場所で好きな野の花と小鳥を目にする手頃な場所であった。春にはウグイスも鳴き、山吹き、雪柳の咲く季節に栗林宏三氏とバッタリ出会い、その日モズとキビタキの存在を初めて教えてくれる。渡りのコースになっているとか。

偶然とは怖しいものでパンフレットを貰い、見てみると東米里の地名、地図を拡げると、いつも行っている雁来大橋の近く、興味も湧いてくる。

６月14日、豊平川右岸のサイクルロードから東米里小中学校の集合場所へ。少し早く着いたので辺りを一周してみる。奇妙な市街化調整区域で人気のない草原や、残土ぬかるみの道に、こんな所に野鳥が居るのか疑心暗鬼の気持。

８時30分集合場所に戻ってみると３人の年配者野鳥の会の人のようで、その中の一人が副会長の戸津氏と紹介される。早速入会の手続きを済せる。

三々五々人が集まり９時軽い説明の後、隊列を組み男女20数名カラフルな合羽に身を包んで出発していく。

難しい取り決めもなく心も軽くなってくる。目の前で鳴いているのはウグイスの失敗の声の主はエゾセンニュウと知り、最初の驚き。

何せ東米里小中グラウンドサッカーゴールに巣作りしているのがコムクドリで雛にエサを運んで３年目の子育てとかに又々驚きの発見の連続。

隊列が長くなり吠える犬のリキにも出会い、最後尾となるがみんなの小鳥に寄せる熱い想いが伝わってくる。本日のハイライト、盛り土の山に雨に濡れて悠然とした姿のオオジシギと初めての対面、スコープの鮮明な画像に映画のシーンのような驚きに感動する。平原のスナイプの異名を持つ堂々たる姿が心に残る。雨にも負けずじっと砂山で何を想うか、私の趣味の作詩にぴったりの光景で、これを見ただけでも幸福な体験であった。終点はどうやら厚別川の川辺りのようで土手からオオヨシキリをスコープで覗かせ

て貰い感激を。

見なかったホオアカ、アリスイを熱く語りながら帰路へ。何年か前にコチドリもやって来た東米里の存在を改めて知らされる。みんな有難とうね。また来ますので‥‥。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、シジュウカラ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソカラス、ハシブトカラス

以上26種

【参加者】阿部真美、井上公雄、岩井　茂、岡本健太郎、小西峰夫・芙美枝、小堀煌治、小松正幸、小山久一、近藤　圭、清水朋子、品川睦生、竹田芳範、田中　洋・雅子、辻　雅司・方子、戸津高保、畑　正輔、浜野チヱ子、松原寛直、百々瀬　満、山田良造、横山加奈子、吉中宏太郎・久子　以上26名

【担当幹事】品川睦生、戸津高保

野幌森林公園

2009. 6. 21

【記録された鳥】アオサギ、トビ、キジバト、アオバト、ツツドリ、フクロウ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、コルリ、クロツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、イカル、ニュウナイスズメ、ハシブトガラス　以上26種

【参加者】井上公雄、今村三枝子、後藤義民、小松正幸、品川睦生、清水朋子、高田征男、東面涼苗、中正憲佶・弘子、成澤里美、蓮井　肇、畑　正輔、早坂泰夫、広木朋子、辺見敦子、星月　豊・卓子、松原寛直・敏子、三輪育子、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子　以上24名

【担当幹事】早坂泰夫、松原寛直

福　　移

2009. 6. 28

石狩市　西尾　京子

私は会社を退職してから、友達が探鳥会のことを教えてくれ、友達の話を聞いているうちに鳥たちの綺麗さ、可愛さ、美しい鳴き声等話をしてくれました。我が家の狭い庭に時々鳥たちが来ても、また来たか、今度いつ来るかなぐらいにしか思っていない私でしたが、友達の話を聞いてからは鳥が来ると双眼鏡を取り出して今までとは違った目で鳥たちを見るようになりました。しかし山やキャンプに行った時などの夜明けに鳥の音楽会が始まり楽しいのですが、声はすれども姿は見えずとはこのことかと思い残念でしかたありませんでした。そんな時友達にさそわれ今回6月28日の福移の探鳥会に参加させて頂きました。とても楽しかったです。いつも聞きなれているヒバリやカッコウの姿を友達や探鳥会の皆さんから説明を受け、そしてすばらしい望遠鏡を覗かせて頂き、姿を見つけることが出来た時は感動しました。友達の話を理解できた瞬間でした。鳥ばかりではなく回りを歩いていると牧草刈をして、ロールになっていく所を見られ、また刈った後に小鳥たちが降り立ち、餌をついばむ光景がなんとも微笑ましく、とても可愛かった。これからも皆さんに鳥の名前、声を聞き分けられる様、楽しみながら参加したいと思っています。

【記録された鳥】アオサギ、トビ、マガモ、キジバト、カッコウ、アマツバメ、カワセミ、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、イワツバメ、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、ウグイス、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上31種

【参加者】阿部真美、五十嵐加代子、井上公雄、今村三枝子、岩崎孝博、大表順子、景安則子、木村　正、木村裕美、栗林宏三、小西峰夫・芙美枝、品川睦生、高橋きよ子、高橋利通、田川　実、竹田芳範、田中　洋・雅子、田中志司子、田辺　至、辻　雅司・方子、戸津高保、成澤里美、西尾京子、蓮井　肇、畑　正輔、浜野チヱ子、早坂泰夫、原　美保、樋口孝城、松原寛直、百々瀬　満、柳川　巌、山本和昭　以上36名

【担当幹事】岩崎孝博、早坂泰夫

サロベツ・ベニヤ原生花園(宿泊探鳥会)

2009. 7. 4～ 5

札幌市西区　蒲澤鉄太郎

10年以上も前に幹事に就任したとき、探鳥会における会員の方々どうしの対話や親睦感を、それまでにも増して一層盛り上げたいという気持がありました。過去に愛護会が旭川近郊の勇駒別温泉で旭川野鳥の会と合同で一泊探鳥会をしたことがあるということを聞いたこともありますが、平成12年にちょうど愛護会が設立30周年を迎えることもあって、宿泊探鳥会が記念行事としても、また親睦感を深めるためにもふさわしいだろうと思いました。幹事会に提案したところ賛同を得て実施されることになりました。私自身、日本野鳥の会に在籍していた時に宿泊探鳥会計画担当の経験もあり、担当を任されることになりました。

その時には、できるだけ多くの会員が参加しやすく、あまり行った事がなく、しかも知名度が高い所ということで、サロベツ・ベニヤ原生花園が選ばれました。「野鳥だより」で募集をしたところ、申し込み日の半日で定員（バスの定

員45名）をオーバーしてしまい、多数の方々にお断りしなければならず恐縮しました。当初は記念行事としての１回だけが予定されていたのですが、毎年開催の要望が強く、回を重ねて今年で10回目を迎えました。利尻・礼文、天売・焼尻を始めとして全道各地を回ったことに満足しています。

毎年開催ということになって何とか10回目まではと思いながら担当を続けさせてもらいました。その目標が達成されたこと、また近年は高齢と病院通いということもあり、今回でお役御免にさせていただきました。参加者の皆様にはいろいろとご協力を賜り、この場を借りてお礼申し上げます。

今回はちょうど一回りということで、１回目と同じサロベツ・ベニヤ原生花園で再度行われました。10年前と鳥の状況が変わっているだろうか知りたい、また、定例の探鳥会ではここ数年観察されていないシマアオジを何とかみたいという声があったことによります。ガイドは動物写真家であり、現地に大変詳しい幌延在住の冨士元寿彦さんにお願いしました。

札幌駅北口を７：00に出発、深川から留萌経由、海岸線の国道232号線を通り最初の探鳥地である遠別町金浦原生花園へ。10年前とは違い立派な看板が立ち、駐車場も舗装されて大型バスが数台は止まれるようになっていました。また探鳥道路も木道に整備されていて驚きました。ノゴマ、コヨシキリ、ノビタキが多くいました。

遠別町道の駅で昼食後、冨士元さんと合流し、カワウの営巣地を案内していただきました。天塩川支流の川岸に10年くらい前から営巣し、その後増え続け、現在は1,000羽ぐらいではないかということでした。幼鳥はまもなく巣立ちの様子でした。カワウ増加による環境への悪影響を冨士元さんは心配していました。

幌延ビジターセンター及びサロベツ原生花園の自然環境はほとんど変わりなく、エゾカンゾウが黄色一面に咲いていました。ノゴマが多く、シマアオジとツメナガセキレイも確認されましたが、実際に見ることができたのは参加者の半数ぐらいでした。時間の関係もあり、その夜のホテルである豊富温泉に引き上げ、夕食、懇親会、冨士元さんのビデオ鑑賞となりました。

翌日早朝、バスで再度同所に行きました。早朝のためか、今度は全員が近くからシマアオジとツメナガセキレイを見ることができ大満足でした。

朝食の後、ベニヤ原生花園に向いました。野草はエゾカンゾウ、コウリンタンポポ、ハマヒルガオ、ハマナスなどが咲き乱れていましたが、野鳥は比較的少なく、ノビタキ、オオジュリン、カッコウなどでした。浜頓別のクッチャロ湖はコハクチョウが北に去り、閑散としていました。

豊富温泉で昼食の後、早めに引き上げ、札幌には予定通り午後６：10頃無事到着しました。

【記録された鳥１】［７．４］金浦原生花園（遠別町）、サロベツ原生花園(幌延町・豊富町）ほか

カイツブリ、アカエリカイツブリ、ウミウ、カワウ、アオサギ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、ノスリ、マガモ、オオジシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ウトウ、キジバト、アオバト、カッコウ、カワセミ、ヒバリ、ツバメ、イワツバメ、ハクセキレイ、ツメナガセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、イソヒヨドリ、ウグイス、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス　以上43種

【記録された鳥２】［７．５］サロベツ原生花園(豊富町)、

宿泊探鳥会集合写真

ベニヤ原生花園（浜頓別町）ほか
アオサギ、トビ、マガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、スズガモ、オオジシギ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、ウトウ、キジバト、アオバト、カッコウ、ツツドリ、アマツバメ、ヒバリ、ツバメ、ハクセキレイ、ツメナガセキレイ、ヒヨドリ、ノゴマ、ノビタキ、ウグイス、シマセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ニュウナイスズメ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス　以上34種

【参加者】赤沼礼子、石井幸子、石橋和子、板田孝弘、岩崎孝博、大町欽子、岡部良雄・三冬、片山慶子、蒲澤鉄太郎、河野美智子、栗林宏三、小西峰夫・芙美子、小林紀子、小堀煌治、近藤綾子、佐々木　裕、志田博明・政子、品川睦生、清水朋子、高橋良直、田中志司子、戸津高保・以知子、中正憲佶・弘子、中嶋慶子、畑　正輔、浜野チヱ子、濱野由美子、原　美保、早坂泰夫・みどり、平野規子、松原寛直・敏子、安　真一郎、山本昌子、横山加奈子、吉中宏太郎・久子　以上43名

【担当幹事】蒲澤鉄太郎、栗林宏三、清水朋子、高橋良直、戸津高保

探鳥会あんないだよ

【野幌森林公園】
2009年10月11日(日)、
11月1日(日)、12月6日(日)

初秋から晩秋の野幌森林公園を楽しみます。夏鳥たちはほとんど渡去し、カラ類やキツツキ類などの留鳥が主体となりますが、12月初めにはツグミやマヒワなどの冬鳥も見られます。晩秋の頃から木々の葉も落ち、鳥は見やすくなります。大沢園地で昼食、午後1時半頃に大沢口に戻り、鳥合わせ、解散となります。

集　合：野幌森林公園大沢口　午前9時
交　通：新札幌駅ターミナル発
夕鉄バス（文京通西行）大沢公園入口下車
ＪＲバス（文京台循環線）文京台南町下車
各徒歩5分

【宮島沼】　2009年10月4日(日)

宮島沼のマガンは、秋は例年9月下旬頃から渡来が始まり、この時期にピークを迎えます。春に比べて滞在期間は短く、群れも大きくはなりませんが、それでも2万羽から3万羽になります。マガンの他にも、ハクチョウ類、カモ類、カイツブリ類などが見られます。少数ですがシギ類も見られることがあります。湖畔から沼を見るだけで、移動はありません。午前11時半頃に鳥合わせをし、自由解散となります。天気が良ければ隣の駐車場横でお弁当を広げることもできます。

集　合：湖畔　午前10時
交　通：岩見沢駅前ターミナル発
又はＪＲ石狩月形駅前発
中央バス（月形行又は岩見沢行）
大富農協前下車　徒歩10分

【ウトナイ湖】　2009年11月8日（日）

冬を間近にし、湖面にはこれから南へ向かったり、近郊で越冬するハクチョウ類、オナガガモ、ヒドリガモ、カワアイサなどのカモ類が浮かんでいます。マガンやヒシクイも見られます。オジロワシが対岸の木にとまっているかもしれません。湖岸をサンクチュアリのセンターまで歩きます。途中の林では渡り途中の小鳥たちが見られることもあります。鳥の出具合にもよりますが、正午頃にセンター内で鳥合わせをし、解散となりますが、センター内で持参の昼食をみんなでというのがいつものパターンです。

集　合：鳥獣保護センター前　午前9時30分
交　通：千歳空港発道南バス苫小牧行
ウトナイ湖下車　徒歩1分

☆いずれの探鳥会も悪天候でない限り行ないます。
☆昼食、雨具、筆記用具をお持ち下さい。
☆問い合わせ　北海道自然保護協会　011－251－5465
午前10時～午後4時（土・日祭日を除く）

鳥民だより

◆野鳥カレンダーの販売◆

今年も「北海道野鳥愛護会」の名前の入ったカレンダーを販売いたします。印刷予定数は**70部**で、価格は1部**1,200円**です。早めにお申し込みください。

お渡しは11月のウトナイ湖探鳥会と、12月の野幌探鳥会になりますので、必ずお受け取りください。申し込み時に受け取り場所もお知らせください。

申し込み先　品川　011－571－6915
小堀　011－591－2836

【新しく会員になられた方々】
大阪　博記　江別市野幌
百々瀬　満　札幌市東区

〔北海道野鳥愛護会〕　年会費　個人2,000円、家族3,000円（会計年度4月より）　郵便振替 02710－5－18287
〒060－0003　札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・六階　北海道自然保護協会気付　☎（011）251－5465
HPのアドレス　http://homepage2. nifty. com/aigokai/